ブラジル日本移民小史

醍醐麻沙夫　編述

目次

０１　日本移民が来るまで
０２　笠戸丸の到着
０３　耕地での紛争
０４　身の振り方
０５　第二回移民船旅順丸
０６　開拓時代　イグアッペ　平野植民地
０７　奥地の開拓
０８　アマゾン移民
０９　都市の人々
１０　第二次世界大戦　戦中と戦後
１１　移住の再開
１２　企業の進出
１３　農業への貢献
１４　日本への就労者
１５　現状

「ブラジル日本移民８０年史」より転載

０１　日本移民が来るまで

最初にブラジルにはいった、まとまった数の東洋人の移民は一八一九年の中国人の約四〇〇～五〇〇名である。リオ州の茶畑やミナス州の鉱山などで働いたといわれる。しかし、この頃のブラジルは労働力としての移民の必要性はさほどなかった。

日本とブラジルは国交がなかったが、一八九五年十一月五日にフランスのパリにおいて日伯修好（しゅうこう）通商航海条約が調印され、これに基づいて一八九七年に両国はそれぞれ公使館を相手国に開設した。日本の初代公使は珍田捨己（ちんだすてみ）で、ブラジルの公使はエンリケ・カルロス・リベイロ・リスボアである。

このころはブラジルにおいても日本においても、移民について関心が高まっていた。しかし一八九七年にはじまったコーヒー不況のために各国からのブラジル移民はすくなかった。労働者に賃金をはらえないコーヒー園が続出したためだった。

三代目の公使　杉村濬（すぎむらふかし）は一九〇五年四月に着任したが、彼はブラジルのおおくの地方を視察に訪れた。一般のブラジル人も日露戦争に勝った国として日本に関心をもっていたので、杉村はどこの視察先でも官民から歓迎された。

好意的なブラジル事情をしるした杉村の報告書がきっかけとなって、日本でもブラジル移民への関心がたかまった。この報告書や堀口書記官の講演などの影響で、単独でブラジルへ渡航する人々もあらわれ、サンパウロには仙台の藤崎商会がＯ　Ｊ

ａｐａｏ　ｅｍ　Ｓａｏ　Ｐａｕｌｏという店をあけた。
リオにも何人かの日本人がきた。
一九〇六年、皇国殖民会社の水野龍（りょう）はブラジルを視察した。このときチリへ行くつもりだった鈴木貞次郎も一緒で、彼は試験的にチビリッサ耕地に入って働いた。
翌年、水野はふたたびブラジルにきてサンパウロ州政府と皇国殖民会社とのあいだに日本移民導入契約がかわされた。
ブラジル側の署名者はサンパウロ州農務長官カルロス・ボテーリョ（Ｃａｒｌｏｓ　Ｂｏｔｅｌｈｏ）である。

その契約のおもな内容。

・　会社は農業労働に適する者三人ないし十人よりなる家族移民三千人をサントス港まで輸送する義務をおう。ただし十二歳から四十五歳までの男女を労働に適する者とみなす。
・一九〇八年以降、毎年千人ずつ送り、四月か五月ころにサントスに着くようにする。
・州政府は十二歳以上に十ポンド。七歳から十二歳までに五ポンドの船賃の補助をする。・耕主は、それぞれ四ポンド、二ポンドずつ船賃の一部を州に払い、それは移民の賃金から差し引く。
・コーヒー園で働く移民は、ヨーロッパ移民とおなじ家屋、同じ賃金を提供する。
コーヒー採取は五十リットル入り袋にたいし四五〇レースないし五百レース。臨時労働にたいし一日二ミルないし二ミル五百レースを支払う。
・会社はポルトガル語またはスペイン語の通訳六人を募集し、

船賃はブラジル政府が払う。賃金は一ヵ月二百ミルレース。政府または耕主がはらう。

水野は一九〇七年の一月に日本へ着き、外務省の許可もえて、ブラジル移民の募集をはじめた。

東京外語学校スペイン語科から五人を募集し（ポルトガル語科はまだなかった）、彼らはシベリア、ヨーロッパを経由して〇八年の五月にサントスに着いた。二年まえからブラジルにいる鈴木が出迎えた。

（のちにブラジル移民が成功したのは、はじめから家族移民を主にしたためだと言われる）

０２　「笠戸丸」の到着

第一回移民船「笠戸丸」は一九〇八年四月二八日に神戸港をでて、シンガポール、ケープタウンに寄港し、五一日の航海ののち六月一八日午前九時半にサントス港についた。

人数は七八一人。そのうち家族数は一六八で、女性は一八六人だった。

家族移民にしては女性がすくないのは、夫婦を主体として、親類知人などの働き手が加わった構成家族のためである。

航海中はブラジルへいって儲かる話で盛り上がった。

このほか、旅費の補助をうけない自由移民一〇名。

それと移民会社の社長の水野と現地支配人の上塚周平（うえづかしゅうへい）の二人や他の乗客もいた。

契約移民七八一人のうち、沖縄県の人が三二四人で、ほぼ半数。つぎが鹿児島県の一七二人である。これはブラジルのように暑い国には、日本の暑い気候の地方の人が向いているのではないかとして、沖縄や鹿児島でおもに募集したためである。

航海中、病気になったり亡くなったりした人はいなかった。初期の日本移民はほとんどが若く健康な人ばかりだった。

その晩は船に泊まった。サンジョアン祭のころで、火風船や花火や焚き火などが人々をむかえているようだった。

翌日の朝、人々は上陸して汽車でサンパウロの移民収容所へむかった。たくさんのブラジル人が日本移民の到着の様子を見

物にきたが、移民たちはブラジルと日本の小旗を汽車の窓から振って人々をよろこばせた。

はじめての日本移民はブラジルの新聞にもおおきく報道され、移民収容所では清潔で行儀がよいことなどが、好意的に報道された。

聖州移民收容所

Immigraçao de Sao Paulo e Sr. Ferraz

サントス港から移住者は皆サンパーロ市の移民收容所に來る。汽車賃と宿泊費も皆聖州の負擔で其上此所では家族移住者一人毎に十五磅宛の渡航費補助がある。（右上）は收容所長。

（到着風景。昭和初期）

六月二七日　沖縄移民の半数が嶺（みね）通訳にともなわれてカナン耕地へ、そのあとの半数は大野（おおの）通訳とフローレス耕地へ出発した。

二八日　鈴木（すずき）通訳とサン・マルチニオ耕地へ。平野（ひらの）通訳とグァタパラ耕地へ出発。

二九日　加藤（かとう）通訳とともにヅーモント耕地へ。

七月六日　仁平（にへい）通訳とともにソブラード耕地へ。

こうして全員がそれぞれのコーヒー園へ出発した。

ただし、自由移民の人たちの多くはサンパウロに仕事をみつけた。レストランの見習いとか、野菜作り、大工、裁縫、などで、皇国植民会社の代理店もＲｕａ　Ｒｏｄｒｉｇｏ　Ｓｉｌｖａ　ｎｏ５０にできた。

０３　耕地での紛争

ブラジルと日本から祝福されてコーヒー園に入った移民たちだが、働きはじめて一週間とたたないうちに不満がくすぶりはじめた。　理由はいくつもあった。

四月か五月の到着が望ましいと契約書にもあったが、移民達の到着が遅れたので、コーヒーはあまり成っていなかった。コーヒー園労働者の収入は、収穫期が主だが、三人家族で一日働いても一袋か一袋半しかとれなかった。慣れないせいがあるにしても少なすぎる。五百レースか七五〇レースにしかならない。日雇いの仕事が一人一日二ミル（二千レース）だから、三人で日雇い一人分の四分の一にしかならない。

衣食はファゼンダ（農場）の売店から購入するが、割高なので大変な赤字である。

コロノの住宅も、予想に反して、粗末なものだった。当時の習慣でコロノ長屋には便所もなかった。

そのうえ、神戸を出航するとき、移民会社は日本政府に納める供託金の八万円がないので、移民達がもっていた金を「ブラジルまで預かる」という名目であずかって政府に払ってしまったので、ブラジルについても返す金はなかった。

もっと大きな原因は、移民会社は旅行者（つまり移民）を輸送してマージンを得る仕組みなので、募集のとき募集人はどうしても夢のようなことをいう。ブラジルが天国のようなことをいい、すぐに大金が儲かるような話をした。それで移民達は借金をしたり家を売ったりして旅費を工面した。借金をしてきた人々はその金をはやく返さなくてはという焦りもあった。日本をでるときの予定では六か月で返せるはずだった。

日本で聞いた話と現実の差がありすぎるので、不満がでても無理はなかった。

移民たちがファゼンダ（耕地）に入って間もなく、七月一八日には、すでにズウモント耕地から四人の独身青年たちが逃げだして、サンパウロのブラス駅で路上生活をしているという知らせが代理人の上塚にとどいた。このときは説得して戻らせたが、八月の末には五二家族全員が退耕してサンパウロの移民収容所へひきあげた。

ほかの耕地でもおなじように争議がおきて、半数ちかくの移民が退耕あるいは逃亡した。

一か所だけ例外はグァタパラ耕地だった。グァタパラ耕地へは通訳の平野運平（ひらのうんぺい）に率いられた二三家族八七人が入ったが、収容所では小柄でニコニコしているだけの印象だった若者の平野は思いもかけぬ指導力を発揮した。

耕地の争議の原因は、不満に火をつける煽動者がいて（おもに船のなかで各県の代表をした人たちだった）、それに皆がしたがうというパターンだった。平野は農場の監督と相談し、先手を打って、不平分子の先頭にたつ鹿児島県代表だった構成家族を即時追放処分にして、農場から追い出した。

移民たちはまだ言葉もわからない。「出るな」といわれると出たくなるが、「出ろ」といわれるとしり込みするのが、心理である。　平野は残った人たちを集めて「こういう状況になったのだから、皆で力をあわせて、ここで働きながら時期を待とう」と説得した。そして自分も先頭にたって働きはじめた。

当時、グァタパラ農場は二百万本のコーヒーがあり、関連施設もふくめて三千人が働き、ブラジル第一と言われた。平野は毎日二百万本のコーヒーの木を見回り、のちに農場の副支配人に抜擢された。

よい指導者をえて、グァタパラにはいった人々は逃げださずに頑張った。

０４　身の振り方

耕地から逃げだした人々の身の振り方は、それ以後の日本移民のブラジル各地への発展と無縁ではない。

サンパウロの移民収容所へもどった人々のうち、沖縄県人のかなりの人数がサントスへ移動した。そこが故郷にいちばん近い場所に思えたし、港には仕事がありそうに思えた。　（「サントスには港の仕事はいくらでもあった」という回想談もあるので、人々の見込みは間違っていなかったようだ）

サントスでは数年後にジュキア鉄道の工事がはじまって、かなりの人が工夫となった。ペルイベ、アナジアスと海岸伝いに工事が進むにしたがって、米作に適した平地があると、それまで受け取った賃金で土地を買って、終点のジュキアに至までそれぞれの土地に住み着いた。

またフローレス耕地へはいった沖縄県人は、通訳だった大野(おおの)がサンパウロ州奥地へ建設中の鉄道工事の仕事の話

サントス市アベニーダ・アンナ・コスタ街

をもってきたので、かなりの人が応募して工夫となり、だんだん奥地へと進み、その鉄道はマット・グロッソのカンポ・グランデが一応の終点だったので、その近辺に住み着いた。

サンパウロに住んだ人々は、言葉が分からないので大工やペドレイロ（煉瓦積み）や女中になるものが一番多かった。まだ原っぱだったブラス区のあたりに住んで野菜作りをはじめる者たちもいた。日本から種をもってきてそれを蒔いたのだが、当時のブラジル人はあまり野菜を食べなかったので、売るのに苦労した。

また、ブラジル人の嗜好もしらずに日本の野菜を作っても人々は食べ方を知らなかった。

このように、笠戸丸の人々は非常な苦労はしたが、若い人たちなので、落ち込まずに現実に向かっていく一種の楽天的な気分もあった。それは石川芳園（いしかわほうえん）の、

春風や　門をいずれば　下婢ならず

という句などからも窺うことができる。

また、中心地のセー広場にちかいコンデ通り付近に、独力で、あるいは共同で古い家を借りる人もあらわれ、そこがそれぞれの県の出身者たちの溜まり場あるいは連絡場所になり、サンパウロ市にもすこしずつ日本人社会が形成されていった。

ついでながら、移植民は困難をともなう事業であり、日本移民の先輩にあたるイタリア、ドイツ、北米移民達が遭遇した困難も忘れてはならないだろう。

（文庫・注。出典の昭和初期の写真集にはコンデ街とあるが、近辺の通りらしい）

日本人街の稱ある聖市コンデ街

０５　第二回移民船　旅順丸

第一回の移民が不成績だったのでサンパウロ州農務局は「一年間六五〇人を限度とする。船賃の援助は一人一〇ポンドを八ポンドとする」と水野に通達した。一九〇八年の末に帰国した水野はさっそく第二回の移民を募集しようとしたが、資金的に行き詰まっていたので日本政府は許可をださなかった。それで水野はブラジル側との契約の権利を土佐の竹村商館にゆずり、二年後の一九一〇年に第二回移民船旅順丸が出発した。五五日の航海をして、六月二八日にサントスに着いた。

〇九年に移民船が来なかったので「日本から見捨てられた」と悲観していた笠戸丸の人々はこの朗報に躍り上がって喜んだという。また、二年間の生活でブラジルにも馴れはじめていた。

旅順丸の移民は二四七家族、人員九〇九（男五一八名、女三九一名）で、サンパウロ州の一七のコーヒー園農場へ配耕された。

ジャタイ耕地のように紛争がおきたところもあるが、おおむねは、第一回のような混乱はなかった。

因みに、一九一七年にはすでに三種類の日本語の週報（はじめは手書きだった）が発行された。そこに笠戸丸から一〇年後のコロノ（コーヒー園農場労働者）としての生活がレポートされているが、Ａ家族（男二、女一、子供二）年間収入三八六三ミル（三コント八六三ミルレース）。支出一四七〇ミル。残金二三九三ミル（約一二〇〇円）。

あるいは働き手が五人いるＢ家族は残金六三七五ミル（約三二〇〇円）

などとあって、新聞用に好調な家族だけ取り上げたかもしれないが、コロノ生活にも馴れて貯蓄がはじまり、つぎの飛躍への準備が整いつつあることが分かる。なお、出納表によるとコーヒー採取そのものの収入はたいした額ではなく、当時の農場は空き地で米をつくったり家畜を飼ったりすることが認められていたので、勤勉な家族のばあい、いわば副業の収入のほうが大きかった。（当時、日本の巡査の月給が１０円といわれる）

０６　開拓時代　植民地の建設

コロノ生活にもブラジルの気候にも馴れて、いくらかの資本の蓄積もできると、自分の土地を持って独立したいという機運が生じるのは自然の成り行きといえる。

ただ、個々の人はまだ言葉も不十分で地権などのことも分からなかったから、そういう交渉ができるリーダーが一括して取得した土地を分譲して、それぞれの家族が入植するという、いわゆるコロニア（入植地あるいは植民地とよばれる）という形態がとられた。

日系コロニアの鎬矢となったのは、第一回移民の通訳としてグァタパラ農場へ入った平野運平がひらいた「平野植民地」である。

しかし、それを述べるまえに、そのような移民達内部から生じた機運とはべつに、日本サイドで「入植地」の計画がすす

み、実現したので、まずそれについて述べたい。

イグアッペ（レジストロ）植民地

一九一〇年、旅順丸の着いた年に青柳郁太郎（いくたろう）が「東京シンジケート」代表としてサンパウロに来てサンパウロ州政府と交渉し、南聖海岸地帯のイグアッペ郡内に、五万ヘクタールの州有地の無料払い下げをうけ日本人入植地をつくるコンセッション契約がかわされた。

青柳は当時の政府要人の秘書をしたり官界財界に豊富な人脈をもち、アメリカで勉強した。以前にペルー領のアマゾン源流を視察したりしている（おそらく、アマゾンの源流を視察した最初の日本人だろうといわれる）。 青柳は日本へもどり桂太郎、渋沢栄一などが名を連ねた「東京シンジケート」は資本金百万円の「ブラジル拓殖会社」となった。

（土地の無料払い下げをうけるコンセッションという制度は、のちのアマゾン移民にも適用されたが、利点と欠点がある。利点としては、相手の政府から無料でたくさんの土地をもらうという話なので、会社として資本が集めやすい。欠点として、定められた期間をすぎると契約は無効になるので、日本との往復に数カ月もかかる当時は、下調べや準備をする時間的余裕がない。また払い下げを受ける土地もまったく無人ではなく、地味のよいところにはすでに住民がいて、使える土地（州有地）は地味がよくなく入植者が苦労する。無料より、はじめからよい土地を買ったほうがよかったというケースがかなりある）

「ブラジル拓殖会社」は現地側との曲折はあったものの、一九

一三年五月にリベイラ河畔のレジストロに先発隊が入り、やや下流のジュポプラに十一月までに三十家族が入植した。そして時の首相桂太郎にちなんで「桂植民地」と命名された。

このときまでに笠戸丸、旅順丸、厳島丸、それに東洋植民会

社の神奈川丸と四五〇〇人ほどの移民がブラジルに入っていたが「数年働けば金をもうけて帰国できる」という宣伝にのって来た人がほとんどで、青柳たちの考える「植民」「永住」に共鳴する人はほとんどいなかった。それで、この時の三〇家族はサンパウロ市にでてきたが、よいこともなくその日暮らしをしていた人達から募集した。　このときからそうだったが「出稼ぎ」と「永住」の相反する二つの指向は、第二次大戦にいたるまでの日本人移民の動向に（底流として）おおきな影響がある。

翌年（一九一四）、上流のレジストロに入植がはじまり、さらに上流のセッチ・バラスなどにも入植地はひろがった。

なお、一九一七年のすえにブラジル関係の各移民会社が統合されて海外興業株式会社（海興）となり、レジストロ植民地の経営も海興になった。

当時としてはまったく不便だった（他地方からの道路はなかった）イグアッペに青柳が入植地建設を決めたのは、大正のはじめという時期もあり、日本での深刻な米不足が背景としてあったようだ。利根川とほぼおなじ規模のリベイラ川のほとりにある、平坦な桂植民地やレジストロ植民地は米作に向いていた。

なお、現在のレジストロは茶の産地であり、旧海興の倉庫が博物館になっている。お盆にはリベイラ川の灯籠流しでにぎわい、入植当時は布やザルでいくらでも掬えたというマンジューバという美味な小魚も名物になっていて、「移民の故郷」ともよばれている。

平野植民地

コーヒー園にコロノとして入った移民達が、ブラジルの事情も分かり、いくらかの資本をためて独立するようになったのは、知られている記録では一九一二年（大正元年）あたりからである。翌年にはサンパウロ近郊のコチアに鈴木貞次郎が土地を世話して、日本人が入りはじめた。

一九一五年にはパウリスタ鉄道線モツーカ駅に東京植民地が、数カ月後にノロエステ鉄道線ペンナ駅（現カフェランディア）に平野植民地の開墾がはじまった。

ともに、初期の重要な入植地だが、あたえた影響の大きさから、平野植民地を例として述べる。

平野運平は笠戸丸の通訳としてきて、ブラジル最大といわれたグァタパラコーヒー園で副支配人にまでなった。

一九一五年（大正四年）というと前年にはブラジル製醤油ができ、サンパウロ市には総領事館が開設され、大正小学校や日本クラブができた。移民達もいつまでもコロノではないという機運が十分に生じていた。

ペンナ駅から十三キロメートル奥へはいった原生林の一帯を取得した。駅といっても数軒の売店があるだけで、まったくの原生林のなかを線路がのびている風景だった。先発隊が小道を切り開いて進み、川幅三メートルほどのドラードス川のほとりに本部を設営し、つぎつぎに人々が入植して抽選で決めたそれぞれの土地を開拓しはじめた。一単位二十五町歩で、当時の安定したコロノ生活では四人家族なら毎月十町歩ずつ買えた。

はじめに米をつくって食料を確保し、それからコーヒーを植えた。

しかし、開拓が軌道にのりはじめたころ発生したマラリアの被害で、正確な人数は不明だが八十名ほどが死亡する惨事となった。米つくりが念頭にあって、まず、川のほとりに住みは

平野運平

Nucleo Colonial de difunto Sr. Hirano

じめたのが被害をおおきくした。
それからバッタの襲来。無数のバッタが飛来して命の綱の作物に群がり、丸坊主にした。線路に群がったバッタの脂で車輪が空転して汽車が進まなくなったというほどの大群だった。
そして霜。コーヒーは霜にきわめて弱い。せっかく育てたコーヒーの樹が一夜の霜で枯死した。
しかし、霜の被害にあった土地、あわなかった土地を入植地の地図にマークすると、どういう地形が霜にあい、あるいはあわなかったか分かった。
このように、平野植民地は原生林を開拓して生活をはじめるという、日本人移民にとってはじめての経験をとおして多くの困難や試練に出会ったが、これらの貴重な経験はつぎつぎに創設された植民地に生かされた。平野運平は苦闘の最中、スペイン風邪にかかって三十四歳であっけなく死んだが、植民地は、第二平野、第三平野と拡張して発展した。

07　奥地の開拓

平野植民地の開拓がはじまったのが一九一五年だが、二〇年代にはいるとハッキリした勢いで日本人移民の原生林開拓がはじまった。その中心となったのが、サンパウロ州のほぼ中心を縦断してマット・グロッソ州まで通じるノロエステ鉄道の沿線だった。東部の（地図では右側）リオやミナス州にちかい一帯にはすでに大コーヒーの農場があったが、ノロエステ鉄道沿線はまったくの処女地だったからだ。

ブラジルで有名なヒゲーラの大木

サンパウロ州のほぼ中央にあるバウルー市を起点として、カフェランジャ、リンス、プロミッソン、ビリグイ、アラサツーバ、ミランドポリスと各駅の周辺に入植地がぞくぞくと建設された。このなかには皇国植民会社代理人として終生、移民達の

事業の前に元始林は斯うして伐採す

世話をして「移民の父」と親しまれた上塚周平の「上塚植民地」（プロミッソン駅）なども含まれる。

一九二〇年のぶらじる時報の記載によると「日本人八千家族のうち、農場労働者、半独立農、独立農がそれぞれ三分の一」とある。　独立農の中心的な作物はコーヒーと綿だった。

これらの入植地では日本人会および青年会、女子青年会と日本語学校などができ、教育、文化、スポーツ、他地域との交流など活発な活動がおこなわれた。ある主婦の回想によると「主人は日本人会の役員をしていたので、ほとんど家の仕事はしなかった」という。陸上競技などの各地大会の記録ひとつみても、これほど矢継ぎ早にあちこちで大会がおこなわれたら、役員はさぞかし多忙だったろうと推察できる。

日本人移民のながれは、さらにパウリスタ延長線、マット・グロッソ州、パラナ州北部、ミナス州へとのびていった。

一九二四年（大正一三）にはサンパウロ州最奥地のミランドポリス市ふきんに信濃海外協会の手によってアリアンサ移住地の建設がはじまった。移住者は日本で土地代金をはらい、永住の目的で移住するシステムで、比較的にインテリがおおく、移住地には私設天文台ができたり、俳句や短歌の会ができたり、アリアンサのみにとどまらず移民社会全体に文化面での寄与がおおきかった。

さらに二九年にはちかくにチエテ移住地がひらかれ香川県の面積に匹敵するといわれた。ブラジル拓植組合が経営し、ブラ拓銀行部はのちに南米銀行へと発展し、日系社会の経済面での寄与がおおきい。

また二七年（昭和二）にはじゃがいもの生産者によるコチア産業組合、さらには南伯産業組合が創立されるなど、各地に産業組合ができはじめた。

コチア産組はのちに南米最大の農業組合になった。生産物の流通、品種の改良などで産業組合がはたした役割はおおきい。

０８　アマゾン移民

一九二五年、芦沢農学士がアマゾン視察のために田付大使に紹介状を依頼したのがきっかけとなり、親日派のベンテス・パラ州統領が「土地はいくらでも提供するから、日本人移民を導入してアマゾンの発展をはかりたい」意向を大使につたえた（パラ州はアマゾン中流から河口を占めている）。

前年にアメリカでは排日移民法案が成立し、ブラジルでも日本人移民を制限するレイス法案が審議された（日本人は産業面では多大な貢献をしつつあったが、反面、コロニアをつくり地域社会と融和しないという非難がおおかった）。

このような情勢のなかの申し出なので、日本での反響もおおきく、鐘紡の福原八郎専務を団長とする視察団と、田付大使一行が翌年の五月にベレンに到着した。

その結果、アカラ（現在のトメアス）に一九二九年に第一回の入植がはじまり、三七年までに二一〇〇名が入植した。

また上流のアマゾナス州からも同様の申し出があり、アマゾン河中流のパリンチンスに上塚代議士（上塚周平の甥）らによってアマゾニア研究所が設立され、のちにアマゾニア産業株式会社となった。そこから支流のラモス河をさかのぼったとこ

ろに大石小作によるアマゾン興業株式会社の入植地もひらかれた。

トメアス入植地はカカオの栽培をめざしたが、うまくいかず、悪性のマラリアの大発生でほとんど潰滅的な打撃をうけたが、試験的に栽培していた胡椒が第二次大戦中に成功し、黒ダイヤといわれるブームを招来し、それまでの苦労がむくわれ

た。

アマゾニア産業のほうは、最初からジュート麻の栽培をめざし、はじめはうまくいかなかったが、ある年、たった二本だけが国際的な規格に成長し、そこからとれた種をもとに、産業として飛躍的に発展しはじめた。しかし基礎がかたまるまえに、第二次世界大戦のために中心となる会社が消滅したので、地域の住民をうるおしはしたが、強力な産業としては発展しえなかった。現在アマゾン河の河畔にすむ日系人は、おもにジュート栽培者だった人々である。

ラモス河畔のアマゾン興業はガラナの栽培をめざしたが、入植者数がすくなく、やがてアマゾニア産業に吸収された。因みに、幅二キロメートルほどのラモス河はまったく澄みきった青い水に岸辺の白い砂が映えるうつくしい河である。大石小作やつづいて入植した崎山比佐衛たちが、ここに一生を懸けると決心したほどの美しい土地ではあった。

０９　都市の人々

一九一四年に第一次世界大戦が勃発したが、その年の九月にサンパウロ日本総領事館が開設された。その頃、地方ではレジストロ植民地、東京植民地、コチア植民地、平野植民地などがぞくぞく創設された。また大阪商船南米行路も開始した。

サンパウロ市では大正小学校、日本クラブ、南米時報、あるいは米人のライト会社社員との野球親善試合、数軒の旅館の開業、醤油、豆腐の製造、スポーツのミカド倶楽部、いくつもの日本食堂など、移民達の都市生活の基盤も整っていった。

だが、おおくの人は無資本で都会にでたので、洗濯屋、八百屋、大工など開業資金のいらない、家族労働力にたよる職業がおおかった。

海外興業株式会社をはじめ、日本資本の事務所や会社がサンパウロ市に集中した。

新聞の文芸欄など、俳句や短歌もさかんになった。古代史研究グループの誕生や農業雑誌なども発刊された。

このように、邦人社会は順調に発展していったが、各国におけるナショナリズムの高揚と、第二次世界大戦の予感が進みつつあった。

ブラジルにおける外国人にたいするナショナリズムの強要（たとえば十四歳以下への外国語教育の禁止など）は、祖国へいつかは帰るつもりで日本的精神に固執する大多数の日本人移民たちにとって、徐々に息苦しいものになっていった。

地方巡回のシネマ屋

１０　第二次世界大戦　戦中と戦後

一九四一年の十二月に太平洋戦争がはじまったが、その年の七月には邦字新聞は停刊を命じられ、移民達は日本語による世界の動きをしることはできなくなった。四十二年の一月には国交断絶のため、在外公館は閉鎖された。そしてサンパウロ州保安局は敵性国民にたいする取り締まり令を公布し、日本語の文章の配付や公衆の場での日本語使用の禁止、旅行の許可制など取り締まりが厳しくなり、またスパイ容疑で拘引される者もおおくなった。

また、アマゾンのベレンではドイツ潜水艦によってリオ行きの客船が撃沈され、ドイツ人と日本人にたいする焼き討ちがはじまり、保護のため両国人は陸の孤島だったトメアスに軟禁された。

このような情勢のもと、かっては力を得つつあった「永住論」はとっくに総崩れとなり、ほとんどの移民達は戦争がおわったら日本へ、あるいは日本の影響下にある南方へ帰ろうと思うようになった。

一九四五年八月、日本の無条件降伏によって戦争は終わった(この年の六月にブラジルは日本に宣戦布告した)。

祖国敗戦の報に移民達はほとんど虚脱状態になり悲しんだが、一日半ほどもすると「日本は勝った」というデマが流れはじめた。負けたというのはアメリカの宣伝だという。

かなり多くの人がこのデマを信じた。

この現象は、たとえば肉親が遭難したという知らせをうけたとき、「無事だった」という知らせのほうを信じたい心理と似

ているかもしれない。
ポルトガル語を読める人は日本の敗戦を認識したが、おおくの移民達は短波放送による日本の戦況報道にたよっていて、その報道では「米国との決戦はこれからだ」と言っていたし、しかも敗戦とともに放送が途絶えたので、その空白をデマニュースが飛び交ったのだった。
一方、祖国の敗戦を認識した人々は、いわゆる「認識運動」をおこし、同胞を啓蒙しようとしたが、両者のあいだにはだんだんと険悪な気配が漂うようになった。
戦時中から祖国に忠誠をつくす目的で幾つかの団体が結成されていたが、そのなかの「臣道連盟」がとびぬけた組織力を発揮し、とくにサンパウロ州を中心に強固な団体へと成長した(会員二万人、家族会員もふくめて十万人と呼号した)。
こうしたなか、ついにテロが発生し、認識派のバストス組合専務がピストルで射殺された。これが終戦の翌年の三月のことだったが、そのころには「特攻隊」と呼ばれた十一人の暗殺隊がサンパウロ市に潜入していた。四月一日に襲撃がおこなわれ、野村氏が殺害され、古屋氏があやうく難をまぬがれた。
かねてから勝ち組、とくに臣連会員たちの不穏な動きに注目していたサンパウロ政治警察局は一斉検挙にのりだし、臣連の幹部級と一般の不審者、約八百名を拘引して取り調べた。
ブラジルの新聞にも連日「シンドウレンメイ」の名が大見出しで躍った。
サンパウロのテロは各地方に連鎖反応をおこし、模倣犯的なテロが続出し、日本人社会は手の付けられない混乱におちいった。終戦一周年のオスワルド・クルース町の騒乱のように、勝

ち組とブラジル人が対立して、数日のあいだ町がまったくの騒乱状態になった事件もある。

テロは翌年の一月を最後として終焉したが、事件は百を越え、犠牲者は二十三人におよんだ。

裁判の結果、直接の犯人や示唆した者など、多数がそれぞれの刑期、あるいは国外追放の名目で、アンシェッタ島の監獄に収容された。

（臣連本部　サンパウロ市）

ちなみに、この事件は日本のみならずブラジル語でもいくつもの著書やレポートがあり、いままで一般には「集団の狂気」として捉えられていたが、最近のあたらしい資料によって、戦

時中から過激な行動を煽動するグループが存在し、戦後はそのグループのリーダーが臣連の理事に就任して、仲間とともにひそかにテロ行為を煽っていたことが明らかになった。

日本の軍国主義でそだった若者たちが、たやすくこの煽動にのったのであった。

したがって臣連とテロとの関係は、本部の理事長や理事たちの多くが知らないところで臣連の名でテロの計画が進められた、というのが真実であろう。

テロが終焉しても、勝ち組はかなり長いあいだ存在したし、祖国へ帰りたいという願望がきえたわけでもなく、それに乗じたさまざまな団体の運動や、詐欺などが日系社会をゆりうごかした。

しかし、戦後一年して、いくつもの邦字新聞が創刊され、人々はしだいに真実にめざめていった。

そして一九五四年（昭和二九）にサンパウロ市創立四〇〇年祭が挙行され、その二年前から日系社会も協力を依頼された。

東山農場の山本博士らが中心になって、その協力団体が結成されるとき、「この祭典には日系人が一体となって協力体制をつくる。戦中、戦後のゴタゴタのことは、勝ち組だった者も、負け組だった者も、これからは一切言わない」というコンセンサスがつくられた。そして、このコンセンサスはおどろくほど守られ、その後の日系社会発展の原動力となった。

なお、四〇〇年祭のあと、その組織が「サンパウロ文化協会」（現サンパウロ文化福祉協会）の母体となり、それは各地

に波及し、それまでの日本人会は文化協会と名乗り、それにふさわしい活動を心がけた。

また、戦前の移民達は祖国の敗戦によって、ブラジルで生きる決心をかため、子供たちの教育に熱心になった。その結果、日系人の社会的地位の上昇は急ピッチで進みはじめたが、一方では「同化速度が速すぎて、自分たち固有の価値観や文化を子供たちに継承させる余裕がない」というブラジル知識人からの指摘もおおかった。

１１　移住の再開

政府間の取り決めではなかったが、ゼッツリオ大統領と交際のあった松原安太郎氏、およびアマゾンのジュート栽培に功績のあった辻小太郎氏に移民導入の枠が与えられた。そして五三年に個人的な呼び寄せや辻移民が到着、五四年の七月には二八

四名の養蚕移民が日本を出発した。

また翌年にはコチア組合が青年一，五〇〇人を導入する許可をうけた。

コチア青年第１次第１回生一同（あめりか丸乗船の前日神戸移住斡旋所屋上にて８月３日撮影）

一九六二年には政府間の移住協定が批准された。

このように、戦後の移民はじょじょに再開されていったが、アマゾン移民のように、劣悪な環境に配置されたような問題もある。一方ではコチア青年移民や産業開発青年隊などは日系社会のあたらしい力となっていった。　日本からきた新移民達のおおくは、戦前にきてすでに成功した移民達の農地に配属され

ることがおおかったが、戦前の日本人と戦後の日本人では考え方におおきな差があって、いろいろなトラブルが生じた時期もある。

１２　企業の進出

ブラジル政府は外国企業を積極的に誘致したので、日本から進出する企業も急増した。　これを歴史的に整理すると、企業の進出は第二次世界大戦以前からあったが、それほどの量ではなかった。例外的に、一九三五年ころからブラジルの綿花にたいする関心が日本ではつよく、おおくの紡績会社や商社が買いつけに来ていた(アマゾン移民の調査にあたり政府の予算措置がまにあわず、鐘紡を中心に調査団がつくられたのも、そのあたりの背景があった)。

戦後の企業進出は商社が先駆けとなった。それから石川島造船、ウジミナス製鉄（合弁）などの大型企業、さらに電機、紡績関係の各社の現地生産、それに付随した会社の進出などがあいついだ。これが一九六〇年以降つづいたが、とくに七〇年代はブラジルブームとさえ呼べた。

しかし、七〇年代の後半から八〇年代にかけてブラジルは赤字財政と極度のインフレに悩み、撤退する会社があいつぐ。

現在はブラジルの経済もほぼ安定し、あたらしい関係が構築されつつある。

ところで、戦後の移住者の数は一九八〇年までで約五万人であり、それ以後は極端にすくなくなり、たとえば一九八七年は二六名のみである。したがって一九八〇年以降は一世が中心と

なるコロニアではなく、じょじょに日系人の時代へと移っていく（戦前移民は１９万人）。

経済だけでなく文化面でも一九〇八年の「ブラジル日本移民百周年は両国政府によって「日本ブラジル交流年」と位置づけられている。

イシブラス造船所全景

１３　農業への貢献について

ブラジルは移民の国であり、各国からの移民達がそれぞれの分野での貢献をしているのだが、日本移民と農業については切り離せない関係があるので、言及しておきたい。

農業の部門でとくに日本移民について言われるのは、新品種の導入と集約農業である。　いったいに笠戸丸がついた頃はブラジル人はほとんど野菜を食べなかったという。それが今日、スーパーなどの売り場に新鮮な野菜や果物があふれている状況にいたるまでの道のりの中で、日本移民がはたした役割がおおきかったことは、移民についての知識があるブラジル人でもひとしく認めている事実である。新品種についていえば、まったくの新品種の導入は三十種をこえると思われるが、改良品種の普及もふくめれば枚挙にいとまがない。

これは、初期にはブラジル人の嗜好もしらなかった移民達が自分たちがいいと思うものを勝手につくって、結果的に「貢献した」という作物もあるにしろ、おおくは「自分たちも食べたいし、ブラジルの人々にも食べてほしい」という熱意から生まれた作物である。　現在は農業をつぐ日系人に減ってはいるが、新しい品種は提供されつづけていて、最近の例でいえば日本のようなほっそりしたキュウリが定着したのはちかごろのことである。それまでは直径八センチほどのおおきな、種のかたくなったキュウリが売られていた。

集約農業についていえば、広大な土地で粗放栽培をしていた普通のブラジル式農法にたいして、狭い土地で丁寧な栽培をするのが農業だと思っていた日本人移民にとって、大都市の近郊

で野菜や果物の集約農業の分野に進出するのは、いわば当然の発展だった。

その結果は品質の向上となり、消費者も品質にたいする目が肥えて、品質のよいものが売れるという状況がつくられた。こんなことは今ではあたりまえに思えるが、そうなるまでは、やはり長い時間がかかっている。

桃園と共の採集實況

１４　日本への就労者

ブラジルでは新首都のブラジリアを建設したときから、慢性的なインフレに悩まされてきたが、一九八〇年代にはハイパーインフレの様相を呈し、庶民の生活をくるしめた。一方、日本では人手不足から日系人を採用する会社がふえた。

一九八六年頃から、いわゆる「出稼ぎブーム」がおきた。

現在（二〇〇七年）では推定された概算で三一万三千人が日本で就労している。

当初は「日系人は日本の習慣になじまない」などの非難もうけた。これは父祖の移民達もブラジルでうけた非難で、移民達がブラジルの生活風俗にだんだん馴染んでいったように、日系人たちも地域社会との協調にめざめるようになった。

ブラジルの経済が一応の復調をした現在、かっての「ブーム」ではなく、日本で仕事をすることは職業選択の一分野として日系人に捉えられているようだ。

また、日本に永住を希望する人もふえている。このような逆流現象がおきることはかっては予想もできなかったことで、あたらしい日伯交流の一面といえよう。

１５　現状

日本人移民史的な視点から現在のブラジルを（とくにサンパウロ市を中心に）みると、一世の高齢化がすすみ、日本語が社会的活動の基盤だった日本人社会、いわゆる「コロニア」はほ

ぼ消滅し、日系人はポルトガル語の社会に移行した。したがっ

（東洋街の七夕。サンパウロ市）

て「日系コミュニティ」という言葉が「コロニア」にかわって使われるようになった。

一般ブラジル人のあいだに日本文化にたいする関心や興味がたかまり、アニメ、和食、漢字（装飾として）など浸透している。

それにつれて、かって東映専門映画館の、いわば門前町として発達した（日本人だけのものだった）ガルボン・ブエノ通りは、現在は「東洋街」として中国人や韓国人たちと協調して、

一般ブラジル人を対象として非常な賑わいをみせるようになった。

日系人のあいだで盛んなのはゲートボール、ソーラン踊り、太鼓、カラオケ（演歌系）などで、一例として二〇〇七年のカンポ・グランデ市でのカラオケ大会では約六〇〇人がブラジル各地から参加し、二十二の部門にわかれてノドをきそった。

すでに記したように、二〇〇八年のブラジル日本移民百周年は「日伯交流年」と位置づけられており、これからの両国の関係のさらなる緊密化と発展が期待されている。

一世が主体となる幾つもの記念行事は、おそらくこれが最後になるという一抹の淋しさもあるが、次世代へひきつぐ希望と期待のほうが大きい。

（おわり）

第１回よさこいソーラン大会
1º Festival de Música Regional Típica
“Yosakoi-Soran”